



野 企 第 2 号
令和7年1月10日

野洲市議会 創政会
会長 荒川 泰宏 様

野洲市長 櫻本 直樹



令和7年度当初予算に対する会派要望について（回答）

新春の候、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

平素は、格別のご高配を賜り厚くお礼申し上げます。

さて、令和6年11月20日付で要望のあった標題の件について、別添のとおり回答
します。

令和7年度当初予算に対する会派要望【創政会】

○野洲市民病院の新築、健全経営の維持および周辺の整備について

現在、市立野洲病院を総合体育館東側市有地に移転し、野洲市民病院として令和8年度開院にむけた取り組みが進められている。

市立野洲病院は、従来、御上会野洲病院として長年にわたり野洲地域の中核病院として地域医療を担ってきたが、昭和60年頃から経営危機となったため、当時の野洲町が9億円を貸し付け、その後も財政支援を行ってきた。しかし、その後も経営状態は好転せず、平成22年には野洲病院から野洲市に対して市が土地、建物や高度医療機器を調達し、野洲病院に貸し付ける手法の「新病院基本構想2010」が示された。

この基本構想は様々な問題があったため却下されたが、その後、市として野洲病院の問題を重要課題として検討することとなり、市議会においても都市基盤整備特別委員会において議論するとともに、平成24年には野洲市新病院整備可能性検討委員会が、平成25年には(仮称)野洲市立病院整備基本構想検討委員会が設置され、さらに平成28年度からは議会において(仮称)野洲市民病院整備事業特別委員会を設置、これと並行して市民懇談会や説明会なども開催され、行政、議会のみならず市民をも巻き込んだ中で協議検討を重ねてきたものである。

この中で、当初計画されていた野洲駅南口駅前での整備は土地の狭小さと経済的合理性に欠けることから、総合体育館横の市有地に整備されることが決定し、令和5年11月8日に野洲市民病院移転整備事業総合評価一般競争入札が執行され、熊谷組を核とする共同企業体が落札し、準備工事等も順調に進行しており、11月からは本体工事に着手する運びとなっている。

市長は公約で「病院事業計画の見直し」を謳っているが、今、仮に病院工事をストップしてしまえば、工事関係者はもちろんのこと、現在勤務する医師や看護師、医療関係者のみならず、近隣市町や国・県はもちろんのこと市民からも市政に対する信用は失墜し、二度と病院建設はできなくなるばかりか現在の市立野洲病院も破綻することは明らかである。

予定どおりの事業進捗を進められる中での検討を図られたい。また、並行して将来の本市の地域医療の在り方を見据えて、公立病院経営強化プランを策定し、健全経営の維持と適正数の医師確保、及び持続発展可能な自治体病院の運営を目指されたい。また、病院予定地周辺について地域拠点としてのインフラ整備を進められたい。

(回答)

野洲市民病院の整備や持続可能な経営の実現は、多くの市民の関心ごとであり、市の重要な課題であります。11月8日における市議会の多数による決議を真摯に踏まえ、総合体育館横市有地における現の計画を、既成の契約に基づいて工程どおりに進めて参ります。

それと同時に、市民のご負担を可能な限り小さくする方法を、現計画・契約を基準として早急に検証し、年明け1月末を目途に、素案を特別委員会や病院事業審議会で審議頂く予定です。この検証の中で、新病院の経営の黒字化に必要な医師確保について具体的な目標を示すことや、基本計画書の収支計画の項目中、現状と最も乖離が大きい「入院収益」について、当該収支計画額を実現できる対策を具体化して参ります。

また、「公立病院経営強化プラン」につきましては、既にご要望いただいている内容も踏まえて令和6年2月に策定しております。毎年内容の見直しを行うよう定められていますことから、本市の地域医療の在り方を見据えて、毎年度、前年度の実績を踏まえ、必要に応じた見直し及び改定をいたします。なお、この「公立病院経営強化プラン」は令和9年度(新病院開院後1年まで)のものとなっていますことから、令和9年度中には新たなプランを策定いたします。

新病院周辺のインフラ整備としては、野洲市舗装修繕計画に基づき、令和6年度から市道市三宅小南線の舗装修繕に着手しました。今後、年次的な白線の工事や市道辻町小比江線の舗装修繕も計画しています。また、令和5年3月に策定した野洲市道路整備計画に基づき、市道辻町小比江線の歩道整備を計画しており、新病院へのアクセス向上に努めてまいります。

○野洲駅南口周辺整備の推進

野洲駅前には野洲市の顔であり、JRで京阪神からのアクセスも良く、県下でも数少ない好立地である。令和5年度において、官民が連携した活性化プランが策定され、市民の声を聴きながら市の玄関口にふさわしいまちづくりを進めている最中である。

美しく整然とした中にも印象深いランドマークの整備とともに歴史や文化・観光の総合的案内所やホテル、レストラン、マンションなど野洲駅を乗降する若者にとって、そして若い子育て世代にとっても魅力ある施設を整備し、野洲市の賑わいと繁栄を図るなかで税収も確保し、収支のバランスを考えた開発とすることが重要である。

もともと野洲駅南口A、Bブロックのエリアの開発は、大正11年に麦酒原料麦芽製造会社である津之国屋が本社および工場を大阪から野洲駅前に移転したことが始まりである。その後、日本麦芽㈱に社名変更され、昭和38年からはアサヒビールより麦芽製造を受託、昭和62年には㈱アサヒビールモルトセンターと社名変更、平成元年に三上工業団地へ移転し、平成2年にアサヒビールモルト㈱に社名変更している。

この結果、空き地となったこのエリアの開発について当時の野洲町とアサヒビールが協調して駅前開発整備計画を進めるため協定を締結した。開発主体はアサヒビールであったが、開発は計画通りに進展せずスーパー銭湯として暫定的利用がなされるにとどまり、平成17年に協定は解除、部分的売却がなされ一部に高層マンションが建設されるに至った。

その後、平成24年にアサヒビールから野洲市に対して残地9,345㎡の売却意向が示され、12億5,000万円で購入したものである。

これを受けて、平成22年に策定された第1次野洲市総合計画ではこの地域を都市拠点として「JR野洲駅周辺は市を代表する拠点として、行政機能、居住機能、商業機能などの充実を進め、市の魅力が発信される中心地として整備を図ります。」としている。

この計画を具体的に進めるため、平成24年には市民の声を聞くまちづくり座談会の開催、平成24年から25年に野洲駅南口周辺整備検討委員会による検討、平成27年には野洲駅南口周辺整備構想の策定、平成30年には野洲市にぎわいづくり市民会議の開催、議会においては都市基盤整備特別委員会の開催などを通じ行政、議会、市民を巻き込んだ協議が続けられてきた。

栢木市政の誕生により、駅前での病院建設計画は撤回され、令和5年の野洲駅南口周辺整備構想検討委員会でも駅前構想から病院機能が外れることに異

論なく了承され、野洲駅前整備計画にはっきりとした方針が確定し、整備が進められることとなった。このことを受けて、財政調整基金から土地購入に係る起債償還を行ったものである。

15年に渡る市民を巻き込んだ議論は民主的ルールに基づき進められた結果であり、これを覆すことは市民の信頼を裏切るばかりでなく、民主主義を冒瀆するものであり断じて許されるものではない。

我々は、現行の計画に基づいた野洲駅南口開発の推進を強く求めるものである。

(回答)

本事業については、野洲駅南口周辺整備構想に基づき、これまで野洲駅南口周辺整備構想検討委員会の他、アンケート調査、市議会都市基盤整備特別委員会、市民懇談会等、丁寧な手続きを踏んで進めてきた事業であることは十分に認識しています。

その上で、選挙による多くの市民の声を踏まえた結果、駅前の土地は売却せず、駅前パークモールを整備する考えです。

ただ、にぎわいを創出し、魅力が感じられる市民のための駅前空間を形成していくという駅前のまちづくりの目的はこれまでと変わらないと考えており、過去の経緯も踏まえ、また様々なご意見やご提案もいただきながら、AブロックからEブロックに配置する機能等を一体的に検討してまいります。

○文化3施設統廃合について

文化3施設の集約化については、当初、教育委員会の案としては一番建築年の浅いさざなみホールを残し、他の2館を解体することであったが、市民説明会等で圧倒的に野洲文化ホールの存続を求める声が多く、結果として野洲文化ホールについて大規模改修をして存続することに決定した。

そもそも、文化3施設の統廃合については、山仲市政の平成30年10月に策定された「野洲市経営改善方針」と元年8月にその具体的な取り組み内容スケジュール等を定めた「野洲市経営改善アクションプラン」に基づくものである。

櫻本市長は令和3年度から令和5年度まで政策調整部の行財政担当改革担当次長としてまさにこの「野洲市経営改善アクションプラン」を推進してきた当事者であり、誰よりもその内容を熟知している立場である。

決定に従い、さざなみホールは解体し、野洲文化ホールの改修と存続を進めることが道理であるにも関わらず、今般の市長選公約には「さざなみホールを解体せずにリノベーション」「改修し、にぎわいを創出」などと謳っているが、明らかな自己矛盾である。

決定に従い、さざなみホールは解体し、野洲文化ホールの改修と存続を進められたい。

(回答)

市内文化施設については、2019年(平成31年)3月に策定しました「野洲市公共施設のあり方」に基づき、老朽化した文化3施設の効率的な運用を図るため、集約化を行うこととし、市民懇談会等で市民のご意見を伺いながら検討を進めた結果、令和6年2月、市として文化施設は野洲文化ホールに集約し、さざなみホールは解体するという方針をお示しました。

しかしながら、子育て世代の方々から市内には子どもたちが室内で遊べる場所が少ないとの意見もを数多くいただいているところです。「若い世代から選ばれるまち」の実現のため、適切な場所を考えたところ、新たに施設を整備するより、現在のさざなみホールをホール機能は廃止したうえで解体せず改修し、雨でも楽しめる屋内「木製遊具」施設等へ活用するほうが有効と考えました。

具体的な整備内容や手法等について現時点では確定しておらず、今後、市民の皆さまの声を丁寧に伺いながら、費用対効果も考慮し、検討してまいります。